



F-SOAIP（生活支援記録法）とは、多職種協働によるマイクロ・メゾ・マクロレベルの実践過程において、生活モデルの視点から、当事者ニーズや観察、支援の根拠、働きかけと当事者の反応等を「F（焦点）」「S（主観的情報・利用者の言葉等）」「O（客観的情報）」「A（アセスメント・考えたこと）」「I（介入・対応したこと）」「P（今後の予定）」の項目で可視化し、PDC Aサイクルに多面的効果を生むリフレクティブな経過記録の方法。

今回は、育児と長期にわたる介護経験から介護事業所を開業した河野礼子さんと、医療福祉分野の政策・行政計画支援に携わる埴岡健一教授が、それぞれの立場で実感しているF-SOAIPでの「可視化」された情報共有の重要性を紹介します。

「困りごと」の見える化で「できる」をつなぐ 科学的介護記録F-SOAIP ～日々の記録からはじまる「できる」へのつながり～

リハビリ型デイサービス リハサロン祖師谷 施設長 河野礼子

1. 災害ケースマネジメントに必要な連携や 支援を「見える化」するF-SOAIP記録

災害は、ある日突然起きるからこそ、自分事として「もしもへの備え」が必要です。発生状況により必要となる支援も違い、緊急性や時期によって課題も次々と変化していきます。マイナンバーカードやデジタル化の導入による支援状況の変化や、災害時のデータ活用も含めた支援体制への検証が大切な備えになります。

少子高齢社会の日本では、過疎化も進み、基本となるガイドラインとは別に場所・人・交通など生活場面を想定した災害ケースマネジメントが重要な役割を

果たします。整備が進められている事業継続計画（BCP）には、各地域で想定される課題への対策が豊富に含まれています。

医療介護福祉の最前線の現場でも、それぞれの活動に伴い、報告・連絡・相談のための記録は切れ目なく必要になります。命や生活をつなぐための継続した支援には、F-SOAIPを活用することで現場の困りごとを多様な立場の多職種で連携し、解決につなげられます。項目別の記録から、現場での連携や支援内容が「見える化」され、読み手の思い違いを減らし、必要な支援をもれなく行うために有効です。

2. それぞれの立場の思いを形に 後悔を最小にするケアマネジメント

災害への備えにつながる日々の対策が必要ですが、支援場面では、財源・制度・人材・時間など制約が多く、本人や家族の希望を十分叶えられないジレンマをだれもが感じています。2歳児の育児中にスタートした長期介護経験から、家族として叶えて欲しい介護を目指し、在宅で暮らし続けるためのリハビ

リデイサービスを開業しましたが、事業所側になると、それぞれの困りごとを解決し、希望を叶える難しさに直面しています。

ダブルケアの家族介護者の立場では、認知症により独居が難しい家族が「認知症ではない。1人で生活できる」と服薬や訪問介護等サービスの受け入れを拒否し、「本人の思い」を尊重された結果、長期に家族介護負担が継続しました。

「本人のできる」に対し、「生活ができていない現実」へ、「本人が必要と感じる支援」が必要であり、家族介護に頼らないケアマネジメントを願っていました。

介護中に出産が重なると「介護してもらえない」と、自立し認知症の進行が緩やかになった経験から、本人が「1人でもできるための自立支援」へ、コミュニケーションを工夫し、必要なサービスを受け入れてもらい、認知症独居の伴走を続けました。手抜きだらけのダブルケアと施設運営をしながら准看護師・看護師と資格を取得した立場から、最小の関わりでも認知症改善や看取りができる方法を伝えるため大学院で研究を

プロフィール

河野 礼子

ダブルケアから、認知症改善目的の施設開業後、准看護師・看護師資格取得。国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 医療福祉経営専攻 医療福祉ジャーナリズム分野 修士課程2年（指導教員：大熊由紀子教授）ケア改革発信を目指し大学院へ進学

